

郷土の詩人

第十二回高森文夫を偲ぶ詩大会

入賞作品集

令和七年一月



第十二回高森文夫を偲ぶ詩大会入賞作品集の発行にあたって

高森文夫を偲ぶ詩大会 会長 那須文美



います。

東京大学仏文学科を卒業後、帰郷。延岡市の旧制延岡中学校教師を勤めた後、旧満州の満州映画協会に入社。終戦後はシベリア抑留（第二次世界大戦で負けた日本人の多くはロシアによって抑留された。）

帰国後は、宮崎県教育委員、延岡市や東郷町の教育長、後に東郷町長を務める等、教育や行政に大きな功績を残しました。

特に、牧水に対する思いが深く「牧水かるた」制作をはじめとする牧水顕彰に尽くしました。「高森文夫を偲ぶ詩大会」は、今回で十二回目となり市内の多くの学校から応募いただきました。二見順雄先生の選により一席一編を含む全十六編が入選しましたので、その作品をまとめて作品集を発行しました。ご鑑賞頂きますならば幸いに存じます。

結びに、奮って作品を投稿された児童の皆さん、並びに、学校において指導いただきました先生、そして、選のご協力を頂きました二見先生に心より厚く御礼申し上げますとともに、今後とも高森文夫が尽くした詩歌の発展を願い、ご挨拶いたします。

令和七年一月吉日

もくじ

《二席》

親がくれたもの 日知屋東小学校 六年 中山 楓大 4

《二席》

千羽鶴 富高小学校 六年 相田 瑚都 6

学校は好き 日知屋小学校 六年 川野 玲蘭 8

《三席》

ひよつとこおどり 富高小学校 六年 尾前 龍輝 10

ぼくは週末コック 日知屋小学校 六年 黒木 幸太朗 12

ぼくの弟 坪谷小学校 五年 水野 大珠 14

《佳作》

名前 富高小学校 六年 伊東 京音 16

牧水カルタ 日知屋小学校 六年 村木 晴香 18

みんなのこころ 大王谷学園 六年 日高 瑛斗 20

勝負の日 大王谷学園 六年 齊藤 彩七 22

時間の流れ 大王谷学園 六年 松尾 奏一朗 24

詩人の船 日知屋東小学校 六年 小田口 令花 26

私と君 日知屋東小学校 六年 黒木 結月 28

一生けん命にする空手の練習 日知屋東小学校 六年 松野 咲茉 30

さよなら 財光寺南小学校 六年 黒木 琉凧 32

私の弟 坪谷小学校 六年 水野 愛瑠 34

《一席》

親がくれたもの

日知屋東小学校 六年 中山 楓 大

お母さんがくれたもの、

お父さんがくれたものは、ぼくの命だ。

親がくれた命は大事にされている。

おじいちゃんだっておばあちゃんだつて

みんなみんな命を大事にしてくれている。

だから自分が大事にしないといけない。

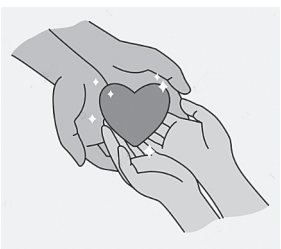
自分の命は一つしかない。

お金や時間よりとてもとても

大切なものです。

自分のことを考えてから

行動しようと改めて考える。



《二席》

千羽鶴

富高小学校 六年 相田 瑚都

折り紙を折りながら考える
昔一つの爆弾で
たくさんの町が 大勢の人が
一瞬にして消え去った
折り紙を折りながら考える
今のくらしじゃ考えられない

自ら船へ飛び込むなんて
死ぬのを覚悟で飛び込むなんて
鶴を折りながら考える
昔たくさんの人たちが
必死の思いで戦わなければ
私は生まれていなかったかもしれぬ
折ってつなげて出来たのは
長寿の象徴「千羽鶴」



《二席》

学校は好き

日知屋小学校 六年 川野 玲 蘭

学校は好き

みんなでじゅぎょうができるから

学校は好き

昼休み遊べるから

学校は好き

修学旅行に行ったから

学校は好き

理科のじゅぎょうで実験ができるから

学校は好き

友達としゃべれるから

学校は好き

楽しいじゅぎょうがうけれるから

学校は好き

好きなじゅぎょうがうけれるから

学校は好き

一年生と遊べるから

学校は好き

他の学年と友達になれるから

学校は好き

先生とじゅぎょうができるから



《三席》

ひよつとこおどり

富高小学校 六年 尾前龍輝

はやしがきこえてくるテンテコテン

テンテコテンテンテコテンテコテンテコテン

おとにあわせておどる

赤いハッピを着てお面をつけたおどり手たち

それをみてワイワイガヤガヤにぎやかな観客たち

そんな観客までおどりたくなるひよつとこおどり

たいこにふえにかねの音

この日はみんなで楽しむぞ

カラカラきこえるおどりとて手が

なにかかかっているそれは、

観客も持っていた

観客みんなでおどり手ににぎやか

ワイワイガヤガヤ

ワイワイガヤガヤ



《三席》

ぼくは週末コック

日知屋小学校 六年 黒木 幸太朗

じゃがいもの皮をむきスライスする
水にジャブんとさらしてフライパンへ
チーズをパラパラとろけさせる
さあ一品完成だ
卵のからをコンコンとわってから
さとうと塩をさつと入れ
シャカシャカと
かきまぜる

フライパンに入れるとジュワツと
いい音いいにおい
ここからは時間勝負だ
フライがえしでグルグルと
たまごのおふとんまいてゆく
さあ一品完成だ
あつあつごはん塩少々
たっぷり両手に水をつけ
優しくふわつとにぎつてく
みんな大好き塩むすび
さあ朝ごはんの完成だ
どうぞめしあがれ



《三席》

ぼくの弟

坪谷小学校 五年 水野大珠

病院で初めて会った日覚えてる？

ガラスごしに見る小さな命

手足バタバタ泣いていた

初めての抱っこ覚えてる？

こわれないかと心配したよ

今では、ムチムチちぎりパン

ミルクをあげた日覚えてる？

小さなお口でゴクゴク飲んできた

たくさん飲んで大きくなーれ

おむつを替えたの覚えてる？

初めてのお世話は難しかった

スッキリしたのか笑ってた

宮参り一緒に行ったの覚えてる？

ぼくもスーツで祈ったよ

スクスク育ちますように



《佳作》

名前

富高小学校 六年 伊東京音

私達には自分だけの名前がある

他の人とはちがうもの

それは大切な人がつけてくれたもの

それは一生に一度の大切なもの

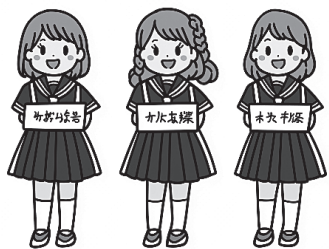
それは生きていくにはかかせないもの

だから私この名前を大切にしようと思う

大切な人がつけてくれた名前で

今日も呼ばれる

自分だけの名前を



《佳作》

牧水カルタ

日知屋小学校 六年 村木晴香

牧水カルタは楽しい
全部の首を覚えられたから
牧水カルタは楽しい
大会に出場できたから
牧水カルタは楽しい
みんなと交流できる場だから
牧水カルタは難しい

カルタの位置が毎回かわるから
牧水カルタは難しい
カルタの場所を覚えられないから

牧水カルタはくやしい
相手に多くの枚数をとられるから
牧水カルタはくやしい
好きな首をとられるから

勝っても負けても
必ずその努力は
むくわれる



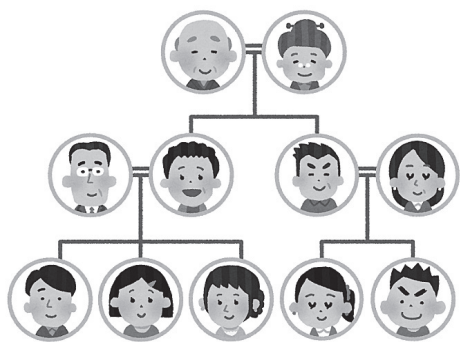
《佳作》

みんなのこころ

大王谷学園 六年 日高 瑛斗

生まれて今まで
つながれる
祖父から父へ
父から子へ
子から孫へ
そしてまた孫が祖父となり
思いやこころ
つながれる

生まれて今まで
とぎれることない
祖父から父へ
父から子へ
子から孫へ
また孫が祖父となる
そうしてつながる
みんなのこころ



《佳作》

勝負の日

大王谷学園 六年 齊藤彩七

塾のテスト

勝負の日

この日のために

時間も身もけずった

前回は越えるために

復習の時間も増やした

緊張するけれど落ちついて挑もう

ピ。ピ。ピ。ピ

タイマーが鳴る

勝負が終わった

全力を尽くした

結果はどうだ

二十五人中四位

自己最高記録

うれしかったし楽しかった

次は一位を目指してがんばろう



《佳作》

時間の流れ

大王谷学園 六年 松尾 奏一朗

「しゃべったよ！初めて!!。」

の言葉から十一年。

十一年前はしゃべっていなかった

ずっと泣いていた。

時間の流れってこんなにすごい

時間はまってくれない。

今は、ずつとは泣かないし、しっかりしゃべれる。

この詩をかいている間も、一秒、一秒と時間が過ぎている。

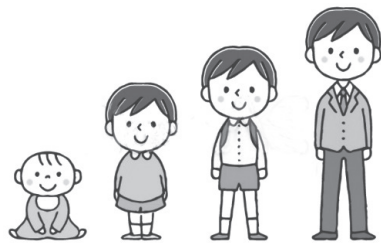
時間ってこんなに速い。

もう十二年間もこの世に生きてる。

息をして十二年

速すぎるな。

すごいな。



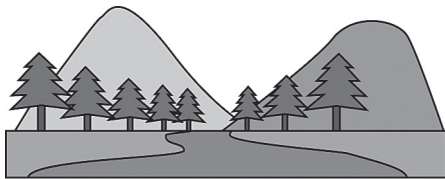
《佳作》

詩人の船

日知屋東小学校 六年 小田口 令花

私のふるさととは、きれいな山がある。
川がある。海がある。
それは、昔の人々が、大切にしてきたからだ。
私は夢の船で川を下る。
高い山から海までの長い川の旅。
途中で木を切る人、道路を作る人、
電気を作る人、魚をとる人、
水道のきれいな水を作る人。

たくさんのくらしを支える人を見た。
そんな大切な山や川の自然が好きだ。
いよいよ私の住む海のまちが見えてきた。
すべての川のゴールの海に。
だけど私は、まだ船をおりない。
この大きな海の前は何があるのだろう。
少しこわくなつて、私は船を下りた。
夢の船は沖にでて見えなくなった。
私は砂浜を歩いて、家に帰った。
おもしろいけど
少しこわい夢だった。



《佳作》

私と君

日知屋東小学校 六年 黒木結月

私が一人になったときには
必ず君がそばにいてくれる
私になみだを流したときには
必ず君がなぐさめてくれる
私がまちがったときには
必ず君が教えてくれる

私がかまっているときには
必ず君が助けてくれる
私が喜んでいるときには
必ず君も喜んでくれる
君が一人になったときには
必ず私がそばにいる



《佳作》

一生けん命にする空手の練習

日知屋東小学校 六年 松野 咲茉

月曜日と水曜日にある空手の練習

基本からしっかりと練習して

基本を型に活かす

型はスピードをつけてていねいに

夏は一生けん命練習すると

あせをたくさんかく

冬は一生けん命練習すると

体があたたまる

休けいの時にしっかりと休けいして

調子が悪くても

練習のときに満足な型ができるようにする

練習は二日しか行けないけど

家でも基本や型の練習をして

大会のときに絶好調で試合ができるように

これからも一生けん命練習をしていきたい



《佳作》

さよなら

財光寺南小学校 六年 黒木 琉 凧

いつか

人と人の間に

別れがくる

いつか必ず

友達との別れがくる

いつか必ず

親との別れがくる

いつか必ず

先生との別れがくる

みんなみんな

さよならがくる

今の生活が幸せでも

結局元気なのは表だけ

頼れる人もいなくて

悩みだけが増えていく

一人で悩んで

追いつめられる

まるで暗闇の中にいるみたい



《佳作》

私の弟

坪谷小学校 六年 水野 愛 瑠

小さなおてて
小さな頭
小さなあんよ
小さなお口
小さなおしり
小さなおなか
小さな命

家にかえるの 楽しみだ

かわいい 笑顔
かわいい ね返り
かわいい なき声
かわいい しゃべり声
かわいい サイズ
かわいい おなら
かわいい ゲップ
かわいい ね顔
全てがどれも 愛しい



■総評

選者 二見 順雄

今年も「高森文夫を偲ぶ詩大会」に市内の多くの学校から応募がありました。なんと「六九六編」もです。よくもまあ、こんなに、とびつくりしました。事務局や先生、みなさんの底力をうれしく思います。集まった作品を分類してみると、今年も、自然を書いた詩、友達・身の周りのこと、自分のこと、学校（勉強外）、動物、植物のこと、命、人生のこと、スポーツのことなどと続きます。これらの作品をていねいに読みました。

作文は初め、中、終わりなどの段落構成が求められます。詩は作文と違って、感覚で処理できます。しかし、どれも書きっぱなしではいけません。推敲（すいこう）く詩や文章をよくしようとは何度も考え、作り直して、さらによい作品にすること。推敲すれば、良い作品になるものがたくさんあります。例えて言うと、ここに粘土があります。この粘土を両手でこねて握りつぶします。握っても握っても指の間から出てくるものがあります。つまり、人間の心で例えるならば「感動」です。言葉に出さずにはおれない。その感動を言葉にする。

人間には、びつくりしたり、とてもうれしかった

り、悲しかったり、ああ、きれいだなあと思ったり、発見したりなどが毎日の暮らしの中にあります。そんなことをメモにしておく、詩や作文で役にたきます。

さて、高森文夫先生についての情報をいくつかお届けしましょう。

先生は「文人町長」（文学者でありながら政治家でもあった）として有名な方でした。そのエピソードのいくつか。

○東京大学を出た秀才にして、たくさん優れた詩を書いた。中原中也という詩人と仲が良く互いの家に行ったり来たりしたほど。中原中也賞を受賞。

○県内の小・中・高校合わせて十七校の校歌を作る。

○町内の子供が全国作文で総理大臣賞や文部大臣賞などを受賞したら、大いに喜ばれ、町長室に招いて、ご褒美の言葉や記念品をくださった。

○文夫先生の最も好きな牧水の歌は

「うすべにに葉はいちはやく萌え出でて咲かむとすなり山桜花」

※若山牧水記念文学館に高森文夫先生の資料が展示されています。今回、見事入賞された皆さん、ぜひとも参観してください。

■入賞作品の寸評

一席 親がくれたもの

自分の命。「親からいただいた命を」大事にしたという本能。一文一語にあなたの気持ちが、じんと伝わってくる。

二席 千羽鶴

千羽鶴を折って戦争で亡くなった方々に思いを届けるあなたの作品に感動した。まさに「言葉の前に」ここにあり、言葉の後ろに行動あり」

二席 学校は好き

不登校の子がたくさんいます。いろんな理由があるのでしょうか。あなたは学校が好き好き。具体的に例をあげながら、見事な詩にした。胸にひびきます。

三席 ひよつとこおどり

テンテコテン、ワイワイガヤガヤ、笛などの音、はつぴ、観覧者などの目の働き、にぎやかななどの心の働きなどで祭りの様子。見事な詩となった。

三席 ぼくは週末コック

におい、音、様子などもただ動きが順序よく書けており、まるでビッグシエフの腕前。朝ごはんの完成。すごい、すごい。

三席 ぼくの弟

かわいい弟の姿を優しく表現しており、読み手も思わずにこにこしている。可愛い姿を自分の言葉で見事な詩にした。

佳作 名前

「一番美しい名前はなんでしょうか」「平和、家族、友情・・・」などと答えるところをあなたは「自分の名前です」と答える、そんな気がする。

佳作 牧水カルタ

昭和四十九年、高森文夫さん（当時教育長）が塩月儀一さん（当時元教育長）達と作った牧水かるた。楽しい、悔しい、難しいなどとあなたの心の底力が見られる。

佳作 みんなのこころ

命は延々とつながっている。祖父母で四人の命の

つながり。平安時代（七九四年）までさかのぼると祖先の数はなんと、十億八千万人とか。

佳作 勝負の日

まず、題名にも緊張感がある。全力を出し切った結果、自己最高記録の達成となった。二連など余計なことがなく、はぎれのよい詩となった。

佳作 時間の流れ

おしゃべりを始めて十二年間。子供の頃は初めての経験ばかりで毎日が新鮮。楽しい発見や出会い。だから時間が短く感じられ。年を取るとその逆。

佳作 詩人の船

題名がユニーク。夢に出てくるふるさとの自然や働く人、そこにはあなたのふるさとを思う限りない愛がある。

佳作 私と君

人間は経験した以上のことはなかなか言葉にできない。その中で感じたことを言葉にすると豊かな詩ができる。この詩は小学生とは思えない凄い作品です。

佳作 一生けん命にする空手の練習

基本技や応用技を組み合わせた一定の順序で作る「空手の技」。これで理想的な全身運動とバランスの取れた身体の発達となる。あなたは字もきれい。

佳作 さよなら

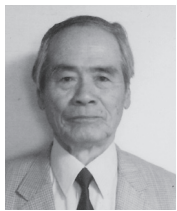
「生は偶然、死は必然」（生まれるのは偶然、死は必ずやってくる）。こんなことを考え始めるのもあなたの年頃から。全力でがんばりましょう。

佳作 私の弟

「うれしい」「かわいい」などを感情表現と言いますが、この言葉を何回聞いても伝わりませんが、具体的にたくさん書いた。面白い詩。すばらしい。

選者紹介

■一見順雄（ふたみよりお）氏



昭和十四年（一九三九年）十一月四日、都城市志和池に生まれる。昭和三十八年三月、宮崎大学学芸学部を卒業。日向市立細島小学校を初任校に、以後三十七年間、県内各地で教鞭を取る。

日向市立財光寺小学校校長を最後に退職。

在職中は作文、児童詩、俳句指導に熱中。指導した児童の作品は総理大臣賞、文部大臣賞、環境長官賞などを受賞し、これら全国規模の受賞作品は四十八点。自身は、国語教育向上の功労として、宮崎県教育委員会から教育特別功労賞、全国的には博報賞、文部大臣奨励賞などを受賞。令和三年度みやざき文学賞「随筆部門」で二席を受賞する。

退職後は、日向市社会教育指導員、家庭児童相談員、区長公民館長などを歴任。現在は、日向若山牧水顕彰会副会長。

小学生が「農業を体験する学校」の校長。この学校は、設立後十六年が経過。卒業生は五四六名になる。県内に同様の姉妹校が三校も誕生し、交流を深めている。農業体験を通して「食・命」の関わり大切さを教え、シニア世代と子ども達との交流が評価され、平成二十四年二月四日「地域づくり総務大臣表彰」を受ける。

第12回 高森文夫を偲ぶ詩大会

【応募数】

学校数	学年別	応募数
12校	4年生	181
	5年生	148
	6年生	367
	計	696

高森文夫の略年表

年代	年齢
明治四三	〇歳
大正 五	六歳
大正十一	十二歳
昭和 二	十七歳
昭和 三	十八歳
昭和 四	十九歳
昭和 六	二十一歳
昭和 七	二十二歳
昭和 八	二十三歳
昭和 九	二十四歳

一月二十日、高森一郎（二代為市）、セツの長男として、現日向市東郷町大字山陰丙一五〇番地に生れる。

四月、東郷村山陰尋常高等小学校（翌年東郷尋常高等小学校に改組）入学。

四月、県立延岡中学校（旧制）入学、下宿生活を始める。

三月、延岡中学校を卒業（第二十四期生）。卒業後、受験勉強のため上京。日夏耿之介主宰の黄眠詩塾に入門する。

十一月、日夏耿之介、堀口大学、西条八十合同編輯の雑誌「パンテオン」に詩「郷愁」を発表（初の作品活字化）。

四月、私立成城高等学校入学、十月、日夏耿之介監修誌「游牧記」に詩「薄暮心」を発表。

一月、吉田秀和と同居を始める。十二月、吉田秀和のフランス語家庭教師であった中原中也を知る。中也から愛用の聖書を与えられる。

四月、東京大学仏文学科進学。八月六日、中也が帰省中の高森宅を訪問。

春、本郷にて、高橋新吉、石川道雄、中原中也、木本秀生と同人詩「半仙戯」創刊打合せ。

五月、石川道雄編輯「半仙戯」創刊、同人として参加し、毎号作品を発表。

六〇七月、帰省中の高森宅を中原中也が訪問。九月、中也とともに「山羊の歌」の題字と装幀を依頼するため高村光太郎を訪問。十二月八日、中也の「山羊の歌」できあがる。

昭和 十	二十五歳
昭和十一	二十六歳
昭和十二	二十七歳
昭和十三	二十八歳
昭和十四	二十九歳
昭和十六	三十一歳
昭和十九	三十四歳
昭和二十	三十五歳
昭和二十四	三十九歳
昭和二十五	四十歳
昭和二十六	四十一歳
昭和二十七	四十二歳

一月中旬、上京の途中、山口に立ち寄り中原中也宅に三泊する。三月、東京大学卒業。

七月、中也来訪（十日頃）、三〇四日滞在する。

夏、父に離れを新築してもらい、その二階を居とする。

十月、県立延岡中学校の教授嘱託（英語）となる。

六月二十五日、第一詩集「浚渫船」出版。七月、中也が「四季」第二十九号に「詩集 浚渫船」と題して紹介文を発表。十月二十二日、中也、鎌倉にて没（三十歳）。

十一月、日夏耿之介の推薦で「中央公論」十一月号に詩「一つの季節」掲載。

三月、延岡中学校を辞職し帰郷。九月六日、宮崎市の中村秀と結婚。当日中也からの書簡を携え、夫人同伴で満州に渡る。十日、新京の満州映画協会に入社。この年、中原中也賞が創設（第一回受賞者は立原道造）、次点となる。

三月、丸山薫編「四季詩集」刊行、作品六篇が集録される。七月、第二回中原中也賞を杉山平一とともに受賞。

三月二十一日、新京にて現地応召、北満虎林の満州第九三〇部隊に入隊。形見がわりに詩集「泡沫集」を編み少数の友人に配る。

八月、終戦とともにシベリアに送られ、ハバロフスク等の收容所で労役に従事。

十二月、ナホトカから舞鶴を経て帰還。

九月、母校東郷小学校の校歌作詞を担当。以後県内各地の小中高校の校歌作詞を依頼される。

十月、三好達治編「日本現代詩大系 第九卷」に未発表作「嫌悪の歌」「石の歌」を含む詩八篇が収録。

十一月一日付で東郷村教育委員長就任。

昭和三十	四十五歳	五月、エッセイ「忘れえぬ人／過ぎし夏の日の事ども 中原中也」(十七日付「朝日新聞」小倉版)掲載。
昭和三十四	四十九歳	十月一日付で延岡市教育委員会教育課長に就任。
昭和三十六	五十一歳	三月、満州時代の知人森繁久弥が公演のため来延、旧交を温める。
昭和三十七	五十二歳	三月十五日、楽譜「惜春」(作曲伊藤宣三)が高森通夫より刊行。
昭和三十九	五十四歳	十月一日付で延岡市教育長に就任。
昭和四十一	五十六歳	三月、弟通夫の主筆誌「一樹」二号に詩「冬」発表。
昭和四十三	五十八歳	二月、第二詩集「昨日の空」出版(装幀高森淳夫)。八月二十四日、この日開催された四季同人会において同人に推挙される。十月一日付で東郷村教育長に就任。
昭和四十六	六十一歳	六月、詩「善光寺」「姥捨」(「四季」第九号)発表。
昭和四十九	六十四歳	この年「牧水カルタ」完成。塩月儀市、大悟法利雄、若山旅人らとともに選歌に携わる。
昭和五十五	七十歳	二月、エッセイ「ある歳末の記憶(中原中也のこと)」を発表。
昭和六十	七十五歳	八月十一日付で東郷町長に就任。九月、エッセイ「満州の空の下で」執筆。
平成元	七十九歳	八月、東郷町長退任。
平成二	八十歳	六月、「赤道」別冊 本多利通追悼号に追悼文「痛恨、本多君」を寄稿。十月十日、第三詩集「舷灯」出版。
平成三	八十一歳	三月、宮崎日日新聞社より詩集「舷灯」に対して第一回宮日出版文化賞が贈られる。
平成七	八十五歳	七月三日、中原中也記念館館長福田百合子が来訪。この日、中也より献呈された「山羊の歌」を記念館に寄贈。また中也詩碑建立の構想を語る。
平成十	八十八歳	六月二日、心筋梗塞のため自宅にて没。法名「叡光院獄桜徳蓮大居士」。県内各紙誌に追悼文が掲載される。

郷土の詩人
第12回高森文夫を偲ぶ詩大会入賞作品集

令和7年1月発行

主催 日向若山牧水顕彰会
若山牧水記念文学館
後援 高森文夫顕彰会

〈事務局〉

〒883-0211 宮崎県日向市東郷町坪谷1271番地

若山牧水記念文学館内

電話 0982-68-9511

FAX 0982-68-9512